

---

# アタシのイケメン兄弟

青矢しずく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アタシのイケメン兄弟

### 【NZコード】

N4301N

### 【作者名】

青矢しづく

### 【あらすじ】

両親は借金を抱えて逃亡。たった1人残された穂乃香は、お城みたいな超豪邸の主、佐賀美家に拾われる。穂乃香の他にも養子が4人、みな男だった。男嫌いな穂乃香にとって、とてつもない日常が始まろうとしていた。更新、再開しました！…とは言つても、更新頻度は少ないのでw

## 01\* 波乱万丈！？想像以上の大豪邸

両親は借金抱えて逃亡。

たつた1人、私だけを残して。

そんな私を養子として取ってくれた佐賀美家。

優しいおじさん、おばさん……そんなイメージじゃない。

別に、暴力をふるわれている……とか、悪い感じでもない。ある意味、とんでもない所に拾われた気がする……

「」「ここですか……」

目の前にそびえたつ、お城みたいな豪邸。

なんか、すごいところに拾われたみたいだ……

「そうよ。ここにはあと4人いるんだけど、今は学校ね」  
「ほお……」

凄すぎて、言葉が出ない。

自分がまさかこんな所に拾われるなんて、思つてもいなかつた。

「それじゃ、ゆっくりしてていいからね  
「えつ、ちょっと…どこに行くんですか？」  
「私は今からフランスよ」  
「ふ、フランス！？」

や、懶懶である。

それに…

「そうそう、言い忘れていた事があつたわ」

「…なんですか？」

「私、ほとんどこの家に帰つてこないから。じゃあね～

「ち、ちょっと…！」

旅行バッグを持って、遠くへ消えて行った。

なんて自由な人だ…

こうなると仕方がない。

用意された部屋で過ぐすこととした。

階段を上がって、メモに描かれた通りに進んで見る。  
まさにお城の中をさまよっているようだ。

突き当たりの部屋、立派なドアだ。

恐る恐る開いてみると、めちゃくちゃ広い。  
物が何一つない、20畳ほどの部屋だった。

「ひ、広い…」

自分の手荷物しかなく、殺風景だった。  
ちょっとほこりっぽい。

窓を開いた。

「う、嘘でしょ…？」

凄く遠くまで見渡せる。  
なんてきれいな景色だ。

今までの借金に追われていた家庭にいた私が、ウソのようだった。

景色に見とれていると、人が見えた。

このお城みたいな家に向かってくる。

あわてて窓を閉じてしまった。

だ、誰？

とりあえず、1階へ降りてみる。  
階段を1段ずつ、恐る恐る…

さつきの人があいた。

もうリビングにいる。

男…どう見ても、男だ。

「ん？」

き、気付かれた！！

慌てて階段を駆け上がろうとする。

だけど、思いつきり足を踏み外してしまった。

「きやつ…！」

痛い…感じがしない。

見ると、さつきの人助けられていた。

「ちょっと、気を付けなよ」

「えつ？あ、ど、どうも…」

「新入りさんでしょ？」

「は、はい…」

よく見ると、かなりイケメン。

おとなしそうで、勉強できますって感じ。

大学生…なのだろうか？

「俺、乃衣。よろしく」

「よ、よろしくです…」

「穂乃香ちゃんでしょ？」

「な、なんで？」

「おばちゃんから聞いてたから。中学生って言つたっけ？」

「…はい、3年です」

「それじゃ、来年から一緒だ」

「一緒つて？」

「高校。俺、今高2だから」

「う、ウソ…？」

「やっぱ見えないよね…」

乃衣は、勉強できてスポーツもできて…

ルックス完璧な高校2年生。

半端なくモテて、2月になると大変だとか。

話をしているうちに、次々と帰つて来た。

「おっ、新入りさん？」

「へー、女子だつたんかあ」

「俺、秀悟。よろしく」

「俺は真人。大学1年だよ」

「よ、よろしくです…」

「秀悟は高2ね」

み、みんな年上だ…しかも、男…

正直言うと、私は男嫌い。

仕方がないとはいって、男ばつかしさはちょっと辛い。  
しかも、みんなイケメン…

最後にかけるしかない…と、ひそかに思つていた。  
それもダメだつた。

「ただいま」

「おっ、帰つてきた。おかえりー」

「新入りさん、来てるよ」

「ふうん」

目が一瞬だけあつた。

でも、すぐに2階に上がつていつた。

「アイツ、女嫌いなんだよね…」

「そ、そりなんですか…」

「勇人はやどつて言うんだ」

同じ中3らしい。

明らかに年上だと思つていた。

みんな大人っぽい。

しかも、最後までイケメン…

タレント、モデル、スポーツ選手並みの。

これからこんな環境で暮さなくちゃいけない。  
私は、ある意味とんでもない所に拾われたのだ…

まだまだ殺風景な部屋。

布団を借りて、部屋のど真ん中に敷いてみる。  
…どこか寂しい。

「あーっ、もお…寝られんっ! -」

微妙だけど、声が響く。

どんなに広いんだ、この部屋は。  
立派なドアを開け、階段を恐る恐る降りて行く。

もう誰も起きていないうだ。

静かすぎて、気持ち悪くなつてくれる。

はあ、なんてとこに拾われたんだろう…

今までの私じゃ、全く考えつかないような生活。  
想像以上に、この家はお金持ちみたいだ。

水を飲もうと、台所へ行った。

…広すぎて、よくわからぬ。

月明かりに照らされた食器棚が、妙に怖い。  
コップをとりだして、水を注ぐ。

水が落ちる音までもが、この台所に響き渡る。  
ホラー映画에서도出てきそうな、すごいことこの  
たとえが悪かつただろ? うか…

2杯目も飲んで、部屋に戻る。した時。  
どこからか視線を感じる。

変な想像をしたためか、めちゃくちゃ怖い。  
恐る恐る振り返ってみる。

「　　！」

声にならない叫び。

人がいる…！

「お前、何してんだよ。こんな時間に」

男…というよりも、聞いた事のあるような声。  
月明かりに照らされ、ようやく誰かが分かった。

「は、勇人君…？」

「さつさと寝ろよ。明日、学校だろ？」

「は、はい…すみません」

「謝ることないだろ。一応兄弟なんだし」

一応…兄弟かあ…

そう言えば、勇人は女嫌いだ。  
きつと話すのが辛いはず。

早く寝よ…そう思い、台所を後にした。

階段を1段ずつ上がっていく。

踏み外さないように、ゆっくりと…

一瞬びっくりした。

隣を、勇人がものすごい勢いで駆け上がりついたのだ。

さすが慣れているものだ…

ようやく部屋の前に着いた私は、またぽつんと敷かれた布団にもぐつた。

そうか、学校か…

名字は前の名前を名乗らせてもらう。

『佐賀美』なんて名前を使っていたら、バレてしまつ。本当にお金持ちとして有名な家らしい。それに、名字が同じ人が同じ学年に…珍しい名字なのに、一緒に人がいたら困るのも当然。だから、『原瀬』はらせを使わせてもらうのだ。

トントン…

「…ん?」

『穂乃香ちゃん、もう朝だよーっ』

「あ…さ?」

ぼんやりとする視界。

あたりを見回すと、何にもない。

そうか、拾われたんだつけ?

むくつと起き上がりつて、髪を少しだけ整える。

そう言えば朝<sup>じ</sup>はん、誰が作るんだ?

階段を下りると、いい匂いがした。

テーブルの上には、おいしそうな料理。

そして、エプロンをつけた真人。

「おはよー」

「お、おはよー」  
「さいます…」

「えつとね…そこの席座つていいからね」

「は、はい」

どうやら、真人が全部作つたらしく。

凄すぎるぞ…尊敬する。

料理が出来ない私にとつて、羨ましい限りだ。

「おひ、今日もうまそうだなっ」

乃衣と秀悟が降りてきた。  
もう準備が整つてるようだ。

最後に勇人が降りてきた。

まだ寝癖がついていて、完全に起ききつていらない様子。

て、低血圧…

みんなそろつて、やつと「いただきます」と言つた。

この光景は、前の原瀬家と同じパターンだ。

違うのは、親がいないだけ。

みんな… そう、兄弟だ。

なんか、変な感じがする。

「お、おいしい…」

「そう? よかつたあ、口に合わなかつたらどうしようつて思つてた

んだ」

めちゃくちゃおいしかった。

レストランに来ました、と言つてもいよいよ感じ。

とにかく、普通じゃない。

…いい意味で、凄すぎる。

みんなそろつて「「」かわいいもん」を言つ。

これも前と変わらない。

慣れ親しんだ雰囲気…どこか懐かしい気がする。

でも、自分を捨てた親が憎い。

…でも、憎めない。

1人残された日、朝、「はんはちゃん」と用意されていた。  
そして、家族3人で写った写真が添えられていた。

涙が溢れ出た。

今でも、その感情を覚えている。

「急がないと、遅刻するぞ」

ぶつきらぼうにそう言つと、勇人は自分の部屋へ入つていった。

中学の制服は、クローゼットにかけてあった。

…クローゼット自体、大きすぎてわけわからないのだけど。

あらかじめ用意されてあつた鏡の前で、身なりを整える。  
ちよつと長い髪は、2つに縛る。

よし、別にこれでいいか…

ドアを開いて、階段を下りる。

玄関へ行くと、勇人が待っていた。

「ほら、行くよ」

「は、はい…」

「、怖いんだけど…」

勇人に対して、少し恐怖を覚えてしまったらしい。

目つきも鋭くて、怖い…

でも、かなり綺麗な顔立ちをしている。

何と言うか…文句のつけようがないイケメン、とでも言っておこう。

男嫌いなわたしにとっては、ちょっと辛い登校となつた。

### 03\* 学校でもモテ男

お城みたいな超豪邸とはうつて変わって、『じく普通の中学だつた。

「一緒に行つたら、何かとマズイだろ」

「は、はい…」

「裏から入るぞ」

「は、はい…」

「…お前さあ、さつきから『は、はい…』しか言つてねえじやん」「い」「メンナサイ…」

「だあ～かあ～らあ～つ一タメでいいから、タメで」

「タメ…」

「…んだから女は嫌いなんだよ」

そう言つと、先々歩いて行つてしまつた。

急いで追いかける。

やつぱり勇人は怖い…

私からしての第一印象は、最悪なものだつた。

職員室へ連れていかれて、先生からいろいろと話を聞かされた。

そして、クラスへと案内された。

勇人とは違うクラスらしい。

「俺、4組だから」

「は、はい…」

「はあ…そんなにタメがダメなら、好きにしろ」

「「」、「めん…なさい」

めっちゃ怖いっ

私は1組で、担任の教科は体育。だからなのか、クラスにはスポーツの出来そうな男子がそろっていた。

女子も女子で、どこか男勝りな人たち。どうも溶け込めそうになかった。

「原瀬穂乃香です。よろしくお願ひします…」

視線が痛い…

こういうのに慣れてないから、すぐ緊張する。学校つて、こんなに緊張するところだつたつけ?

席は一番後ろで、運よく窓側。

端っこだから、1人でいても大丈夫。ちょっと安心した。

休み時間は質問攻めにあった。

：みんな男子だ。

怖くて怖くて…というより、教室に女子がない。

「じ、女子は…？」

「ん？あいつらは、毎時間4組行つてるから」「どうして…」

「原瀬さんにも紹介した方がいいのかな…」「すっぴえイケメン君がいるわけよ」

男子に連れられて、4組へ向かった。

女子から注目されている人…めちゃくちゃ見覚えがあつた。

「佐賀美勇人。 お金持ちでさ、ルックス完璧じゃん。 超モテるんだよね」

そんなに…

ということは、ほかの3人もモテモテなのだろうか？

そんな人たちと一緒に住んでいても、大丈夫なのだろうか？

勇人が私の方を見た。

男子に囲まれてたから、目立ったのかもしれない。  
でも私から目をそらした。

あまりに怖くて…

学校は、とにかく質問攻めで終わつた。

帰りも、なかなか準備が出来ない。

女子はみんな引き上げて行つた。

勇人が玄関を出たかららしい。

「そんなに人気なんだね…」

「おっ、ときめかなかつたのか？」

「私は…正直言うと、男嫌いだし…」

「ま、まじー？」

「それじゃ、俺らと話してると辛いとか？」

それは当たり前。  
かなりキツイ。

とにかく、早く帰りたい。

女子はみんな学校 자체から出たらしい。

男子だけが残っている。

とりあえず、帰りたい…

数分後、息を荒くした勇人が1組の出入り口にいた。

「どうした？モテ男君よお」

「どうもこうもないよ。ほら、行くぞ」

「行くつて、どこにだよ」

「とにかく、帰るつて言つてるんだつ！」

やつぱ怖いよおお

鞄をとつて、教科書を詰めた。

男子が机の周りに立つていたけど、勇人に引っ張り出された。

「か、帰るつて…原瀬さんとだつたのか！？」

「家が近いんだよ。親からも頼まれてんだ」

「おいおい、お前らしくねえぞ。女子を送つてやるよかよお

「連れて帰ると小遣いが貰えるんだよつ」

「さ、さすがお金持ち…」

腕をがつしりと掴まれているから、痛い。  
そのまま引っ張り出されて、廊下に出た。

「あ、あと一つ言つておくけど…この事女子に言つなよ

勇人はすごい睨みを利かせている。

男子は、みんな硬直しながらうなづいた。

恐るべし勇人…

私の中での印象は、ますますとてもないものとなっている。  
めちゃめちゃ怖くて、学校で女子にモテる。  
だけど、裏ではてっぺん取つてゐるような奴。  
不良中の不良、そんな感じだ。

「ね、ねえ…痛い」

ずっと手首をつかまれていた。

掴まれていた場所は、赤くなっている。

「う、ゴメン」

そう言いつと、先々歩いて行ってしまった。

私は急いでついて行つた。

なんか、あんまり楽しくない学校だったわけで。  
とにかく、勇人の印象は最悪そのものだつた。

自分、これから耐えていける自信がありましょーん…

## 04\* 勇人の弱点とムカつくな

「おひ、お帰り~」

出迎えてくれたのは乃衣。  
乃依は、いつも帰りが早いらしい。

「穂乃香ちゃんっ」

「は、はい?」

「部屋に荷物が届いてるから。ねばねちゃんからだよ」

「荷物?」

「たぶん、俺たちにも届いたやつだと想ひ。だから、驚かないでね」「わ、分かりました……」

みんなにも届いたもの?

荷物つて、なんだろ?」

といつあえず、自分の部屋へ行つた。

ドアを開けると、そこには段ボールの三、四、五。

「おひわす……」

よく見ると、机やベッド、テレビなどの中身だった。  
そして手紙が1通。  
おばちゃんといやらかだつた。

『穂乃香ちゃんへ

›送った家具は、自由に使ってくださいねっ！

›あと、ほしいものがあれば何でも言ってちょうだい。

›すぐに送つてあげるからね。』

さすがお金持ち..

と言つ事は、他の4人の部屋にもこんな家具があるという事だ。  
今までとの違いに、かなり戸惑つていた。

とりあえず、段ボールから出さなくちや

テレビを出してみる。

出すまでは簡単だ。

ベッドも、机も、段ボールから出すだけなら簡単だった。

問題はこれからだ。

組み立て、接続…女一人の力では到底無理。

どうするものか…私は考えた。

誰かに手伝つてもらう?

いやあ、頼むのがちょっと…

そんなこんな思つていると、勇人がやつてきた。

「1人でやるつもりか?」

「いや…やろうとは思つたんだけど」

「ちょっと待つてろ」

そう言い残すと、乃衣を呼んできた。  
乃依は、すぐに机とベッドを組み立ててくれた。

勇人は、テレビの接続をしてくれた。

これでこの先、1人で何でもできる。

2人には感謝だ…つて、あれ?

勇人のイメージが、違うような…

「あ、ありがとうございます」

「いいよお。分からぬ事とかあつたら、何でも聞いてね」

「はいっ」

「ついでに、勇人は隣の部屋だから」

「えつ！？」

・隣とは言つても、隣じやない感覚。

広すぎて、誰がどこの部屋なのか把握していなかつた。  
この豪邸、まだ知らない部屋がたくさんありそうだ。

私は、ちょっとだけワクワクしていた。

2人が部屋を後にした後、家具を頑張つて好きな位置に動かした。  
それでも部屋は広すぎる。

壁も何にもない…ポスターでも、貼るか。

はあ…とは言つても、ポスターって何の…あつ！

思いだした。

わざかなかおこずかいで買つてもらつていた雑誌。

その雑誌についていたポスター。

・スポーツ関係だから、女の子らしさがない。

でも、この広い部屋に貼るにはちょうどよかつた。

一枚一枚、丁寧に貼つていく。

貼つても、やっぱり壁は広く、大きく見えた。

かわいらしいオレンジの時計。

私が好きな色を知っていたかのよつこ、オレンジや黄色でそろえら  
れている部屋。

居心地は、一人にしては広すぎるけど最高だった。

「こんな部屋に一人でいて、なんかもつたいない…

借錢に追われていた家族の一員だつた私だ。

こんなきなり贅沢させてもらえると、やっぱり戸惑う。  
この先、こんなずつと贅沢な暮しなのか…

不安だつてよぎるわけで。

これが自分の部屋と言つたら、普通の人は驚くつて。  
ここに両親がいたら…なんて思つてしまふ自分。  
捨てられた身でりながら、やつぱり憎めない。  
あの写真は、机の横に飾つた。

辛い思い出と言えばそうだけど、やつぱり家族だし。  
重たい話になつてしまつた…

ベッドで「ンリリ」としていると、ノックの音が聞こえた。

「はい？」

『入つていいか？』

「は、はい…？」

誰の声かよくわからない。  
ガチャツ、ドアが開く。

勇人が勉強道具を持つてやつて來た。

「分からぬといところがあるから、教えろ」

そこ命令口調…

「頭いいんじゃないの？」

「当然つ！ただ…家庭科は無理」  
「な、なるほど…そういう事か」

家庭科の教科書と、裁縫道具を持っていたのだ。  
最初は筆箱かと思っていた。

小さいバッグを作るというのが課題らしい。  
どうもボタンが縫い付けられないのだとか。  
かなり不器用…思つた以上に。

「ちゃんと先生の話聞いてたの？」  
「聞いてダメなんだから！」  
「クラスの女子とか、教えてくれるでしょ？人気なんだから」「それもそれで」「

あまりの人気ぶりに、教える女子が殺到して…だそうだ。  
分かる気がする。

1日学校にいただけで、どのくらいの人気なのが分かつた。  
ちょっと厄介な悩み。  
私には考えられない…って感じだ。

「ほら、指氣をつけてよ」「  
「分かつてるつて…つてえ」「  
「だから言つたのに…」「  
「分かつてるつて言つてんぢろつ…つたあ」「  
「そんな乱暴な言葉遣いするなら、教えてあげないよ」「…」

おとなしく言つた通りにするよつになつた。  
子供…だんだん可笑しくなつてきた。

あれだけ人気の勇人が、まずここまで不器用で。  
そしてまさかのめちゃくちゃ子供つていつ…

「できたっ」

すうじく嬉しそうに、出来上がったバッグを見ていた。  
ふと見せた笑顔が可愛くて…見とれてしまった。

やつぱイケメンと言われるだけある。

スッと整った顔立ちに、ふと見せる笑顔。

モテるという意味がよく分かる。

ただ、私は全然ときめかない。

たとえ笑顔に見とれていたとしても、性格が…

「…サンキュー」

そう言って勇人は部屋を出た。  
どんだけ照れ屋なんだか…

そうそう、強がっている割には照れ屋だと言つ事が分かった。  
だから…なおさらイライラがたまつてくるわけ。  
強がってるくせして、実際めちゃくちゃ『氣弱い』。

なんかむかつく奴だよね…

## 05\* 眸しい笑顔は可愛い彼女

学校にはだいぶ慣れた。

ただ…あの女子のテンションにはついていけない。  
勇人がクラスの前を通れば、みんな注目するし。  
みんなの目にはどう映っているのか…

ここにきて、初めての休日。

そうとは言つても、何にもしない。

いつもと変わらずみんなでご飯食べて、テレビを見たり勉強したり…

ただ、ちょっと違つた事はあつた。

それは、ついやつとの事…

ピーンポーン

テレビを見てたら、急にチャイムが鳴つた。  
しかも…

ピーンポーン…ピーンポーン…

何回も、何回も…連打ではないけど。

「アイツか…」

勇人はそう言った。

「来たみたいだよ

秀悟はそう言った。

乃衣は、キヨロキヨロしている。

そして真人を見つけた途端、手を引っ張つて玄関へ行つた。

「…誰が来たの？」

「まあ、見ればわかるって」

テレビを見ている私たちの前に現れたのは、めちゃくちゃ可愛い…お姉さんだった。

美人、だけど可愛い。

それはもう、私が今まで見た事のないような、妖精のようだった。

…それは言い過ぎか。

「こんにちわあ」

「こんにちは」

「あれ？新入りさん？」

「そうだよ。穂乃香ちゃん」

「穂乃ちゃん！よろしくねっ」

「よ、よろしくです…」

異常にテンションは高くて、学校にいる女子と変わんなかった。  
ていうか、何者だ…？

「私、みわ美羽」

「美羽…さん？」

「真人の彼女だよ。真人自慢の彼女。なつ？」

「…まあ、ね」

「何でそんなに複雑そうな顔するのよぉ…」

真人の彼女…よくお似合いだ。

### 美男美女カップルってか…

美羽は、真人と同じ大学に通う一年生。お金持ちで、結構有名らしい。学校中の生徒公認の、美男美女カップル。そう紹介された。

美羽は、「ご飯の支度まで手伝ってくれた。真人と2人で作ってる姿は、微笑ましいばかりだ。かなりおばちゃん発言なんだけど…。」

「穂乃香ちゃん、学校にはなれた?」「少し…だけ」「やつぱり、溶け込みづらいよね」「勇人と一緒に住んでるってのがバレンタインの限り、大丈夫でしょ」  
どう答えたらいいのか…てか、やつぱりモテ方が尋常じやないんだよな…

「これから、いろいろと大変だよ…」「やつぱり…」「何かあつたら、私に相談してね!ほら、男の子には言えない悩みとかもあるじゃない?」「悩み…?」「そうそう。学校変わったんだから、また新しい恋とかあるでしょ、きっと」「いや…新しい恋って言つか、恋愛には興味ないから…」

「男が苦手なんだと」

「そうなのー? それじゃ、この環境も大変じゃない?」

本当はそうなのかも知れないけど…

「いや、意外と大丈夫みたいですね」

「そつか。これから、男嫌いが治るといいね」

え、笑顔が眩しい…

こんな可愛い人が真人の彼女ってなら、誰も批判しないか。

改めて思った。

そして、美羽なら頼れるとも思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4301n/>

---

アタシのイケメン兄弟

2010年12月11日08時27分発行